

経済学方法論における近代と現代

只 腰 親 和

- 1 19世紀前半期イギリスにおける経済学方法論の形成
- 2 現代における経済学方法論の動向
- 3 経済学方法論の歴史的対比

1 19世紀前半期イギリスにおける経済学方法論の形成

私はこれまで、いくつかの論文でアダム・スミス以後、19世紀前半期のイギリスにおける経済学方法論の形成過程について何人かの論者を取りあげて検討してきた¹⁾。すなわち、伝統的な学問分野である道徳哲学の内部で経済学方法論に関わる考察をしていたデュガルド・ステュアートに始まり、道徳哲学を母体にして新興の学として独立しつつあった経済学に則して方法論の問題を次第に斯学内に内在するかたちで練り上げてきた、J. ミル、マカロク、ウェイトリを順次とりあげてきた。

上に述べたようにスミス以後の人々に私は着目してきたが、スミスに関して言えば、たしかに彼自身、周知のように「天文学史」で興味ある科学方法論を論じているし、「『道徳感情論』は、……感覚原理に基づく自然法学展開のための方法原理確立の必要から生まれた、法学構築のための方法序説であった」（田中 1988, 189, 傍点原文、以下も特にことわらない限り同様）、あるいは、『道徳感情論』において、「富の世界の法則的な把握のモデルが示されている」（内田 1989, 112）として、『国富論』以前のスミスの作品が、『国富論』の形成に資する方法論的な志向性を有していることがこれまでも指摘されてきた。したがって、スミスがイギリスにおける社会科学方法論の初期的形成にまったく無関係だったのではないことはあらためて再言するまでもない。だが、スミスが固有な意味での経済学方法論を正面から論じていたとは言い難く、スミスにおける経済学の課題と成果は、やはり基本的には経済学それ自体の体系的提示にあったと言える。その点をめぐっては、J. S. ミルの以下の言葉が説得的な説明を与えてくれよう。

ミルは最初、『ウェストミンスター・レビュー』に発表された論文「経済学の定義と経済学に固

1) 只腰 2010a, 2016, 2017, 2018a, 2018c.

有の研究方法」(1836, 後に、『経済学試論集』に掲載。引用はそれに基づく全集版。以下では「定義と方法」と略記)の劈頭で次のように言っている。「ひとつの科学の定義は、それが教育的順序 didactic order でふつう占めるのと同じ位置を年代順でも占めるように……想像されるかもしれない」。「だが、それは実情とは全く異なっている」。(Mill 1844, 309-310 訳339)²⁾彼がここで述べようとしているのは、ひとつの科学——ここでは経済学——の定義は、教室で講義されるような場合であればふつう講義の最初に説明が行われる。したがってその科学が歴史の上で現実に誕生してくる際にも、まず定義が明確に規定されて時間的にそれに後続して、その科学の全命題が導出されるように想像されるかもしれないが、それは事実とは違っているということである。

ミルは興味ある比喩をまじえながら説明をさらに続けている。「ひとつの科学の定義は、ほとんど常にその科学自身の創始に先行せずに、後続する。ひとつの都市の城壁と同じように、それはたいてい、のちに出現するかもしれない建物の入れ物になるために設けられるのではなく、すでに存在する集合体を囲い込むために設けられる」。一科学の実質的部分と定義との時間的な成立関係を、一都市の中身と城壁の関係になぞらえながら、科学のある一部門の生成はまず最初に定義の定立があって、しかる後にその科学の実質的部分が形成されるのではなく、その逆であることを主張している。さらに「人類は知的開拓のための土地に植え始める前に、その土地の区分けをしたのではなかった。人類は最初に人間的研究の分野を規則正しい区画に分割して、それからそこに設定された目的のために真理を収集し始めるのではない」(ibid., 310 訳339)と言っている。ここで主張されているのは、狭い意味での一科学の定義だけではなく、科学の境界設定の問題も含み、方法論一般についての議論と解することができる³⁾。

そこでアダム・スミスに戻って考えると、スミスが経済学において行ったのは、ミルの言葉を用いて表せば都市の城壁を構築することではなく、都市の中身の創出にあったと言って誤りでなかろう。スミスだけではないが、スミスによる都市の中身の構築をひとつの有力な前提にしてそれ以後の人々による、定義や方法といった城壁構築が可能になったのである。

冒頭に述べたように、私は19世紀前半期における経済学方法論の問題をひとりの特定個人に限定してではなく、ステュアート、J. ミル、マカロク、ウェイトリ4人の思想史的流れのなかで捉えてきた。それは、当該の時代における経済学方法論の相継起する系統的な形成過程にひとつの道筋を跡づけようことを示すことによって、この時代の経済学方法論の個々の存在や相互の動向が——当人たちがそれを意識するか否かは別に——けっして孤立した脈絡のない断片的、偶然的な事象ではないことを明らかにするためであった。

このように言う時、上にも引用したJ. S. ミルへの参看が求められるかもしれない。と言うの

2) 翻訳は参考にさせて頂いているが適宜、変更している。以下、同じ。

3) ミルの時代における定義は、「まだ、既存のより広い何かの学科に経済学が包摂されるのを防ぐ、対象と研究方法の独自性を証明しなければならなかった」(Kirkner 1960, 13)。

は、上に名前を挙げた人々の多くと J. S. ミルとはある意味では同時代人であって、方法論史上では時系列的に彼らの直後に位置しており、しかも「世界で最初の本格的な社会科学方法論についての著作」（富永 1984, 93）と称される『論理学体系』（以下『体系』と略記）を彼は世に問うているからである。たしかに、J. S. ミルは『体系』の第 6 編で社会科学方法論について立ち入って考察し、幾何学的方法、化学的方法、物理学的方法という仕方で社会科学の方法を整理、類型化しつつ経済学方法論にも分析の歩を進めている。その意味で、ミルのその書物は 19 世紀前半期の時点でのイギリス経済学方法論の完成形態と言えるかもしれない。にもかかわらず私が J. S. ミルに先行する上記の学者たちに焦点を合わせるの、以下のような考え方に基いている。

たしかに経済学の方法をミルのようなかたちで定式化することの意義は否定できないが、他方でそのような経済学方法論の定式化にいたる試行錯誤的な形成過程も、定式化され完成した結果にまさるとも劣らず重要だという点を忘れてはならない。現代の経済学方法論において、例えばマクロスキーは、経済学方法論におけるポパーの反証主義やラカトシュの MSRP（科学的研究プログラムの方法論）といった定式による手法を批判して、「科学をポパーやラカトシュの鋳型に押し込んで、われわれは何を得たのか」（McClosky 1988, 56）として、方法論において何らかの規範的図式を前提にして論をすすめることを批判している。また、「私は、経済学史を科学史の一部門とみなす熱心な支持者」（Shabas 2002, 209）だと公言して、経済学史や経済学方法論に科学史の成果を取り入れることに積極的なシェイバースも、「クーンの共約不可能性やラカトシュのハードコア」といった概念装置を本家本元の科学史家たちの間でよりも愛用する、経済学方法論者の「クーン、ラカトシュ、ポパー」への偏愛には批判的な姿勢をとっている（Shabas 1992, 196）。彼女も図式主義的なアプローチには批判的なのである。

これは経済学方法論の現代の動向であるが、私が関心をよせてきた 19 世紀前半期は、経済学がディシプリンとして成立する時期であって、それに照応して、J. S. ミルの先の比喻を借用すれば、経済学方法論という都市を囲む城壁がじょじょに構築されつつある時代であった。したがって、ミルの『体系』のような仕方で、当代の方法論が形成された「作業の終わったあとを完了形」で示すこともさることながら、経済学方法論が次第に構築されてくる「作業の現場」（内田 1989, 15）に焦点を当てることは意義あることであると考ええる。

さらに言えばミルの『体系』自身、それ以前の人々の方法論的考察を抜きに無前提で成立したものではない。その経緯はすでに早く、矢島杜夫『論理学体系の形成』に示されているが、例えば私が別稿で明らかにしたウェイトリの所論との関係で、『体系』（および「定義と方法」）とウェイトリとの具体的な結びつきを示せば次のように言えよう。

ミルは『体系』で、社会科学の対象である、社会現象の複雑性・相互規定性を主張している。「同一の社会の他のすべての部分の状態に多少とも影響を受けない社会現象はない」。そのような社会現象の相互連関を生理学の術語である「協働 consensus」という語を用いて表し、社会現象に

は、「人間の身体のさまざまな器官や機能の間にあるのと類似した」(Mill 1843, 899) 相互作用のあることを指摘している。そしてそのような意味で、人間の身体が「自然的身体 body natural」であるとすれば、社会科学の対象は「政治体 body politic」であると規定している。社会科学の対象である社会現象が相互に影響しあう性質をもつとみなす、このようなミルの見方の背景には、アシュリーが指摘していたようにコントへの強い関心があったと思われる。そのコントは、「人間の社会生活のあらゆる面を包括する」(Ashley 1909, xii 傍点原文イタリック、以下も同様) 学問としての社会学を構想していたが、そのような立場から経済学の個別科学としての自立には批判的であった。すなわちコントによれば、同時代の「経済学は根本的に形而上学的」(ibid., xiii) であり、「経済学者たちが正当化しようと努めてきた、他の社会研究の分野からの経済学の分離こそ決定的な非難」の根拠であった (ibid., xiv)。つまり、コントにとって、経済現象をそれと密接不可分な政治や道徳の現象と切り離して分析する、独立の学としての経済学は非難の対象であった。

上に見たように、ミルは種々の社会現象が相互に関連していることを認める点ではコントと軌を一にしている。しかし他方で、経済学の学としての自立にはコントとは異なり肯定的な立場をとっている。ミルは言う。「社会の作用のどの部分で起こることも、他のあらゆる部分へのそれなりの影響なしには起こらないという、普遍的な協働〔の事実〕にもかかわらず……以下のことはなお真実である。すなわち、ことなる種類の社会的事実には大部分、直接にそして結局は異種の原因に依拠しており、したがって、別々に研究するのが有益でありうるだけでなく、そうせねばならないということである」。(Mill 1843, 900)

このようにミルは一方で、社会現象の複雑性、相互規定性を協働という概念を通じて認めながら、他方で、異なる社会的事実には異なる原因が存するとして、社会科学の諸分野の専門分化をも同時に肯定している。そしてそのような社会科学の専門分野の唯一の実例として経済学が挙げられている。彼は言う。「例えば、社会現象のひとつの大きな部類があり、そこでは直接に決定的な原因は、主として富への欲望 desire of wealth によって作動する原因であり、主に関係する心理学的法則は、より多い利得がより少ない利得より選好されるという、周知の法則である」。(ibid., 901)

ミルは上に見たように異種の社会的事実には異種の原因が対応していると主張していたが、その彼にとって、経済学では究極の原因が「富への欲望」に還元できることが学の独立の条件と考えられている。「富への欲望」という概念は、別稿で明らかにしたように、ウェイトリが注目していた概念であった⁴⁾。ウェイトリは経済活動の動機として使われることのある「強欲 avarice」に替えて、「富への欲望」を経済学では用いることを主張した。それは、強欲が道徳的に悪徳を含意するので、道徳的に中立的な「富への欲望」を価値中立的な「科学」に相応しい概念として使用すべきであるとの趣旨であった。ミルが、今見ている個所で安んじて富への欲望を経済学の独立性の根拠

4) 只腰 2010a, 44.

として措定できるのは、ウェイトリのこのような主張を下敷きにしていると考えることができよう。ミルはさらにそれを、「より多い利得がより少ない利得より選好される」「心理学的法則」と言っているが、それは富への欲望を自然科学の中核的概念である「法則」へと還元することによって、より科学化しようとするものと言えよう⁵⁾。つまり、倫理的判断の対象とされやすい強欲という倫理的・道德哲学的な呼称が、ウェイトリにおいて富への欲望という概念によってその倫理的色合いを脱色化されて価値自由化した流れをミルは延長して、自然科学とも共通する「法則」という定式を与えることを通じて、コントに抗して経済学の独自の科学としての自立を正当化したのである。

たしかにミルの『体系』は19世紀前半期のイギリス経済学方法論において枢要の位置を占めると言ってもよいが、私がこれまで検討してきた、『体系』に先行する諸論者の経済学方法論は、上のような意味で独自の存在意義をもっていると考えられる。

2 現代における経済学方法論の動向

上に述べたように、イギリス19世紀前半期の歴史的過程の推移において、伝統的な学問分野であった道德哲学の体系のなかに萌芽がきざした、新興の学としての経済学に関する方法論の形成が、じょじょにその新興の科学そのものの論理に内在しつつその姿態を整えてくる経緯を私はみてきた。そして、そこでの経済学方法論の形成過程の統一的な特徴を表現すれば、ディシプリンとしての経済学の自立を支える方法論であったと言えよう。

もしこのように19世紀前半期の経済学方法論をディシプリンとしての自立との関連で特徴づけることが妥当であるとすれば、この論点については現代における経済学方法論に関しても類似の観点から接近することが可能である。もちろん、19世紀の前半期と現代とを単純に同一視することができないのは言うまでもないが、一定の共通点をもつ二つの時代の経済学方法論を歴史的文脈の相違に留意して比較あるいは対比するのは可能であるのみならず、歴史研究を通じて現代の問題の一面に照明を当てるといふ点からも有益なことであると思われる。

そこで、そのような課題に着手するためにはまず、現代の経済学方法論における「ディシプリンとしての自立」の意味を最初に確認しておく必要がある。それは、当然のことながら19世紀前半期とまったく同一の事柄というわけではない。つまり19世紀前半期の問題は新興の学としての経済学の自立であり、それとの関連で私は経済学方法論を祖上にのせたのに対し、現代においては経済学の下位分野 sub-field のひとつである経済学方法論それ自体のディシプリンとしての自立が19世

5) 「倫理的に判断された動機も経験科学の理論に従えばただ因果的に制約されているものにすぎない」(Weber 1905, 225 訳116)。

紀前半期との類比的な（と同時に対比的な）考察の対象となる。私自身、別の場所で現代の経済学方法論の動向については考察を加えたので⁶⁾、ここではそれらを利用しながら大まかな流れを検討したい。

バックハウスは、「1970年代以降、経済学方法論に対する関心は劇的に高まり」（Backhouse 1994, 1）、「1980年代の終わりまでには、経済学方法論は経済学内部で識別のできる一下位学科となっていた」（ibid., 4）と言っている。彼はこのように述べる理由として、論文や専門書、教科書等の「経済学方法論についての文献が、1980年代の間に急速に増加した」（ibid., 4）ことと、経済学方法論に特化した学術雑誌が三つ発刊されるようになった事実を指摘している。このように1980年代終わりころには経済学方法論が一つのディシプリンとして目に見える形で自立してきたことは、ダウも、1997年の論文で「方法論の分野は過去10年を通じて著しく拡張し、豊富な論説を発展させた。文献は膨大でますます専門化している」（Dow 1997, 74）⁷⁾と、その後の活況を追認していることから首肯できる事実と言えよう。

バックハウスが、経済学方法論のディシプリンとしての自立にかんして上のように述べるもうひとつの理由は、1980年に公刊されたブローグの著『経済学方法論』の存在がある。バックハウスは次のように言っている。「『経済学方法論』を貫通している支配的な主題は反証主義であった。もっと具体的に言えば、ポパーを経済学における方法論的議論の中心に位置せしめる因となった人物はブローグであった」（Backhouse 1994, 3）。そして、「1980年代に多くの新しい主題が出現し、大勢の経済学方法論者たちが反証主義に代わるものを追求してはいたが、ブローグの書物がしばしばその背景にあった。人々が新しい領域を切り開いていたところでさえ、彼の書物はそれに対して戦う必要のあった正統的学説としばしば受け取られた」（ibid., 4）。

このように「正統的学説」としてのブローグの著『経済学方法論』が、バックハウスによってディシプリンとしての経済学方法論の自立のひとつのメルクマールとされているが、ブローグの主張を「伝統的方法論」（Dow 1997, 75）、あるいは「公認の方法論」（ibid., 78）と呼んでいるダウも同じような認識に立っていると言えよう。つまり主要な専門家が、経済学方法論にかんするブローグの立場を、ディシプリンとしての経済学方法論の自立の目安としているのだが、20世紀の経済学方法論の歴史をもう少し遡るとその点をさらに掘り下げて理解することが可能になると思う。

上のダウからの引用（の前者）を、より正確に記すと彼女は次のように言っている。「ハチスン（1938）とブローグ（1980）でいちばん明確に提起されている……主流派経済学の伝統的方法論は、理論評価のための良い科学的実践の規則からなっている。これらの規則は、経済学者に最善の理論を決定する基準を提供するとともに、科学と非科学をはっきり区別する手段の役割も果たして

6) 只腰 2010b, 2018b.

7) バックハウスが挙げている学術雑誌のうち二つ、*Economics and Philosophy* と *Journal of Economic Methodology*（その前身は *Methodus*）を、ダウも挙げている。

いる」(Dow 1997, 75). ダウのこの言明は、ブローグの立場が20世紀の経済学史的文脈のなかで、経済学方法論として「正統的学説」である所以を簡潔に語っている。要するに、経済学方法論の目的は、科学と非科学の境界基準であると同時に、特定の経済学上の理論の科学性を評価する規則を提示すること、にあるということになる。ブローグにあっては、そのような科学と非科学を区別する基準、規則としてポパーの反証主義に依拠したのであるが、ダウも名前を挙げているように、そのような問題の立て方にかんしてさらに経済学方法論の歴史を遡ればハチスンに至る。

ブローグは彼の著の冒頭ちかくで、ひとつの学としての経済学方法論を定義して、「『経済学方法論』とは、科学哲学が経済学にたんに適用されたものとして理解されるべきである」。(Blaug 1980, x i.『』は原文では引用符。したがって「一つの学科としての経済学方法論」の意味であってブローグの著作名の意味ではない)と述べている。ブローグの言うように、現代の経済学方法論においては経済学と並んで、科学哲学というもうひとつの学問分野が重要な役割を担っている。科学哲学について一般的に叙述すれば、「科学哲学の主要な課題とは、一言でいえば、『科学とは何だろうか』という問いかけに答えることである」(内井 1995, 4)。科学哲学を一般的に定義すればそのようになるであろうが、ここで問題にしている20世紀以降の経済学方法論との関連について言えば、上のような科学哲学の課題に取り組んだのは、論理実証主義の哲学であった。野家啓一は、科学哲学という、「本来は歴史哲学や社会哲学などと並ぶべき哲学の一領域を指すはずの言葉が、わが国では移入の経過など諸般の事情から、『論理実証主義』という特定の哲学的立場を指す語として用いられてきた」(野家 1993, 1)として、日本での科学哲学の実情を述べている。20世紀以降で経済学方法論が主に論じられたイギリスやアメリカ合衆国における経済学方法論との関連での「科学哲学」に関しても、論理実証主義について似たようなことが言えるように思う。つまり「1920年代にオーストリア、ドイツ、ポーランドで生まれた20世紀前半の有力な科学哲学的立場」であり、「現代科学哲学のルーツ」(戸田山 2005, 60-61)である論理実証主義の哲学が、今日の経済学方法論を考えるうえでも出発点に立つ。

論理実証主義の科学哲学の核心をごく簡単に言えば、「意味のある文というのは検証できる文のことだ、逆に検証不可能な文は無意味だ」という基本的立場から、「科学の命題は有意義、それ以外は無意味という仕方で、科学と非科学に線を引こうとした」(戸田山 2005, 62-63)と整理できる。つまり論理実証主義の科学哲学は、経験的事実による検証可能性という基準で、ある理論が科学であるか非科学であるかを区分した点に大きな特徴がある。そして経済学史上ではハチスンが、「経済学に論理実証主義のいくつかの中心思想を導入」(Boylan and O'Gorman 1995, 12)した経済学方法論者とされており、ハチスンの名前がブローグとともに挙げられている、先に見たダウからの引用もこうした歴史的背景を考慮にいれば理解が容易であろう⁸⁾。

8) じっさいハチスンは次のように言っている。「人が『科学的』と呼ぶひとつの活動に従事することにな

ハチスンとブローグ二人の主著の間には40年以上の年月の懸隔があるが、にもかかわらず二人が並び称されるのは、論理実証主義をルーツとする20世紀の科学哲学の伝統が根底に潜流していたからであった。だが、たしかに「現代の科学哲学は、20世紀初頭に現れた論理実証主義と呼ばれる一連の動きから生じた」(Redman 1991, 7 訳8)のは事実であるとしても、論理実証主義の哲学がその出現以来、それ以降、現代までの科学哲学を支配していたわけではない。1984年の時点ですでに少なくとも経済学方法論者の間では、論理「『実証主義者』が嘲笑的に使われる言葉」(Caldwell 1984, 2)であったことは、コールドウェルによって示唆されている。論理実証主義が20世紀の科学哲学のルーツではあっても、その後きびしく批判されるようになる基本的問題は、「いわゆる帰納の問題」(Boumans and Davis 2010, 18)という点にあった。

よく知られているように「帰納の問題」とは、以下のような事柄である。「ある人が白鳥に出会うとしよう。しかし彼が何度白い白鳥に出会ったとしても、論理実証主義者が信じていたように、『すべての白鳥は白い』という普遍的言明は確証されえない。将来、黒い白鳥が現れるかもしれないからである」(Redman 1991, 29 訳51)。検証可能性を科学と非科学との境界基準とみなす論理実証主義の立場からは、いわば検証の不可能性をつきつける上のような「帰納の問題」は容易に解決できない難問であった。これに対して、「帰納を完全に破棄」(ibid. 訳50)して、反証主義を導入したのがポパーであった。ポパーによれば、ひとつの理論の経験的事実による検証は不可能で、「ひとつの理論は、その理論の含意に矛盾する経験的観察によって誤りが証明されるのである」(Boumans and Davis 2010, 74)という反証主義の立場によって、「反証可能性を科学と非科学を区分する彼の基準にした」(ibid.)のがポパーであった。

先の引用で、「ポパーを経済学における方法論的議論の中心に位置せしめる因となった人物はブローグであった」として、ポパーの反証主義に依拠したことによって現代における経済学方法論のディシプリンの自立のメルクマールとされていたブローグは、このような歴史的文脈に位置していた。ポパーは論理実証主義の哲学を批判したのであり、ブローグはそのポパーを受容したのであるが、にもかかわらずブローグがハチスン⁹⁾と並んで「伝統的方法論」者とされるのは、ブローグが経済学方法論の課題を、ダウの言うように「理論評価のための良い科学的実践の規則」の探求に求めているからである。論理実証主義者もポパーもその点では変わりはない。つまり、科学者が理論形成にあたり従うべき「良い科学的実践の規則」を探求する、科学方法論における規範的アプローチという点では同じ立場に立っていた。1980年代の終わりには経済学方法論が経済学の下位学

にか目的があるとするならば、そして、『科学』という言葉がたんにいんちき、偏見、宣伝のための広範な口実でないとするならば、科学の素材となりうる命題とそうでない命題を識別する決定的な客観的基準があるにちがいないし、倫理的ないし政治的情念、詩的情感や形而上学的思弁の諸表現が、いわゆる『科学』に仲間入りするのを阻止するなにか有効な防壁があるにちがいない」(Hutchison 1938, 10)。

9) 「ハチスンは論理実証主義の導入者であると同時にポパーの擁護者でもあった」(Dow 1997, 76)。

科として認知され、ブローグがその分野における「正統的学説」の位置をしめていたとする、先のバックハウスの言葉の背景には、論理実証主義を出発点とする現代経済学方法論の歴史をめぐってこのような流れが存していた。

先に見たようにバックハウスもダウも、ブローグの所説の、現代の経済学方法論史上における正統性を認めていたが、他方で、前述のように「1980年代に多くの新しい主題が出現し、大勢の経済学方法論者たちが反証主義に代わるものを追求してはいたが、ブローグの書物がしばしばその背景にあった。人々が新しい領域を切り開いていたところでさえ、彼の書物はそれに対して戦う必要のあった正統的学説としばしば受け取られた」として、ブローグの学説が無条件に支持されていたのではない事実を語っていた。1980年代にはすでにブローグへの批判が提出されていたということである。この点に関連して、ブローグのような経済学方法論の規範的立場に対して、批判的観点から同時代の当該分野の状況を考察しているのがワイントラウブである。

ワイントラウブが1989年——バックハウスが、経済学の下位学科としての経済学方法論が識別されうるとした1980年代の終わり——に発表した論文は、「方法論はどうでもよい Methodology doesn't Matter」という刺激的なタイトル名であった。彼の言う「方法論はどうでもよい」という立場を支えている論拠をごく簡略化して言えば、経済学方法論者は、経済学者の「実践を、実践の外側の特権的立場から検討することを要求」（Weintraub 2007, 481）している点に大きな問題があるということになる。つまり経済学上の具体的な論点——一般均衡理論や顕示選好等の例を彼はあげているが——を経済学者が実際に支持したり反駁したりするのは、それがなんらかの外在的な方法論的基準を満たすか否かによるのではない（外在的というのは、論理実証主義の検証可能性概念のように、経済学以外の領域から援用した諸概念という意味）。経済学者の実践現場での実態と相反するにもかかわらず、そうした外在的な基準に関して議論を喋々と展開しているのが経済学方法論者たちであって、そのような経済学「方法論はどうでもよい」というのが、ワイントラウブの主張である。外在的基準という点では、ポパーの反証可能性基準もラカトシュのMSRPもそれに該当しよう。

「正統的学説」に対するワイントラウブと同じような批判は、ハンズもしている。ハンズもワイントラウブと同様、論文に「方法論は死んだ」という扇情的ともいえるタイトルを付しているが、彼は、「20世紀の大部分の間、経済学方法論にとっての……真に決定的な目的」の達成に失敗したという意味で、「経済学方法論は死んだ」と言うのである。その目的とは、「経済科学の適切な遂行のための、明確に特定化された少数の方法論的な規則を見出すこと」（Hands 2001a, 49）であって、経済学方法論者たちはこの課題に失敗したとハンズは考えている。ハンズはこのような否定的に評価する経済学方法論のあり方を、別の書物では、「哲学の棚アプローチ」（Hands 2001b, 6 訳 6）あるいは「借りものの規則を提供する経済学方法論」（ibid., 7 訳 7）と呼んでいる。つまり論理実証主義等の科学哲学が用意してくれる「哲学（的諸概念）の棚」から科学の基準にふさわしい

規則をただ借用してくるような、経済学「方法論は死んだ」というのが、ハンズの主張である。そういう点で、外在的な基準に依拠する経済学方法論を批判するワイントラウブと類似の主張をしているとみなせる。

こうして論理実証主義とならんでポパーの反証主義も批判をうけたのだが、ポパーが科学哲学の一つとして批判された内在的な理由は以下のようなことが考えられる。第一はデュエム・クワインのテーゼによって、「理論は諸仮説の複雑な結合体なので、矛盾する証拠によってどの仮説が否定されるのかを判定するのが現実には不可能」(Dow 1997, 76) だという問題があった。第二は理論負荷性の問題で、ある理論がなんらかの事実によって反証されるというのがポパーの主張のエッセンスだが、個々の「事実は理論負荷的」(ibid.) なので、区別されると言われる事実と理論の峻別は実行不能だという問題である。こうした論理的根拠を背景にして、現実の経済学（の歴史）において反証主義が実行されていないというのがポパーに対する有力な反対論となった。たしかに、経済学をふくむ個別科学の現場ではある理論に不都合な事実が出現したり、発見されたりしたら、直ちにその理論を捨て去るのではなく、その理論に修正をくわえて生かそうとするのが現実であろう。

その点に関して、ある論者はクーンとの対比で次のように言っている。「今あるデータと理論間の適合具合の不十分・不完全こそがいつでも、通常科学を特徴づける多くのパズルを定義する。もしあらゆる適合の不具合がひとつの理論の棄却の根拠ならば、すべての理論がいつでも棄却されるべきである」(Boumans and Davis 2010, 104) ここには、科学者の作業の大半は、既存のパラダイムの下でのパズル解きとしての通常科学である、というクーン科学論に基づくポパー批判が、簡潔に記されている。要するに「クーンは、実証主義者や反証主義者の見解よりも、科学史に一致すると彼が信じる科学の説明を発展させていった」(Redman 1991, 16 訳26) 点に、大きな意義があった。

こうして経済学方法論者には、科学的実践で守られるべき規則を探求する前に、「経済学者たちが現実に行っていることを理解しなければならない」(Backhouse 1994, 4) という方向への関心が高まってきた。そして、このような旧来の規範的アプローチではなくて、あくまでも科学者たちの「現実の実践」(Dow 1997, 78) に則して科学方法論を追求する記述的アプローチが優勢になることについては、クーンの影響が大きかった。デイビスの言うように「クーンの書物以降の方法論的思想における高速度の変化」は、経済学方法論の分野が、「永久の革命状態」にあるとって過言ではない (Davis 2003, 572)。

その後の経済学方法論の現状は、論理実証主義やポパーを基盤にしたかつての「正統的学説」、「公認の方法論」はその座をおり、複数の立場が主張を述べ合う、「多様化の時代」(Boylan and O'Gorman 1995, 34) が続いている。その詳細を説明するのはここでの主題ではないが、主要なものを挙げると、1) 「よい科学はよい対話である」(McClosky 1985, 27 訳34) という立場で、経済学方法論を説得性の問題と捉え、したがって「科学者たちが、ある法則を主張する時には、他の科学者たちを説得しようとしているのだ」(ibid., 58 訳78) というマクロスキーに代表される、レト

リックの経済学の立場。2) 経済学の制度化に典型化される社会学的観点からの方法論アプローチで、制度的・外形的側面のみならず、経済学をふくむ「科学的知識と見なされるものは、それを生み出す社会的システムの産物である」(Backhouse 1994, 11)として、科学的知識それ自体の社会性を強調する科学知識の社会学の立場。3) 経済学において、「説明するとは、観察可能な経済現象を生み出す真の経済的原因を経済理論によって明らかにすることである」(Boylan and O'Gorman 1995, 3)として、認識対象の実在性を主張する実在論の立場。4) 一方で経済学「方法論研究者の役割は、第一にいかなる単一の『所与の』方法もないということを示すことである」として唯一絶対の方法論には否定的だが、他方で、「それでも理に適ったそして実り豊かな批判や論争は依然として可能であることを示す」(Caldwell 1982, 247 訳338)のを目指す、方法論的多元論の立場等がある。

これにとどまらず他にもさまざまな主張がなされており¹⁰⁾、経済学方法論の分野が、「永久の革命状態」であると評される所以である。こうした現状に対して、「実証主義のピューリタンの厳格さがいいのはいいことだが、自由恋愛の方法論はもっとよいか？」(Caldwell 1989, 14)という問いかけが、コールドウェルによって30年前になされている。「厳格な」規範的枠組みを探索する論理実証主義の後退は歓迎しながらも、その後の経済学方法論における百家争鳴状態には必ずしも同意できない意向を、比喩を用いて表明していると思われるが、30年経た今日においても的外れでないひとつの見方であろう。

3 経済学方法論の歴史的対比

先に述べたように、私がこれまでの拙稿で考察してきた19世紀前半期のイギリス経済学（以下Ⅰと略記）と、現代の経済学方法論（以下Ⅱ）とはディシプリンとしての自立という点で共通点をもっていると思われるが、すぐ上で見てきたことからもうかがい知られるように、当然のことながら歴史的文脈の相違による両者の違いも明らかである。以下では、文脈の相違に留意してⅠとⅡとの対比的考察を試みたい。

ⅠとⅡがディシプリンとしての自立という点で共通項を有しているということは、当然のことながら、諸学問間の分業関係が両者の歴史的文脈の相違をこえてⅠとⅡの底流にあるということになる。なぜなら、かりにすべてを包括するたったひとつの学問領域しか存在しなければ、それはディシプリンと呼ぶことはできないからである。他とは異なる独自の対象、方法、体系等を有するので、ある領域がひとつのディシプリンという名に値することになる。それゆえ、ディシプリンとしての自立という問題を考える際には、『国富論』冒頭の、分業論の学問論への適用のくだりはや

10) 詳しくは Hands 2001b.

は歴史をこえて大きな意味をもっている。

先に見た、論理実証主義やポパーを批判するマクロスキーは、自ら「私はポストモダニスト」(McClosky 1994, 298)と自認するようにその批判の視野は広く、デカルトにはじまる「モダニズム」——そこにはデカルト、ヒューム、コント、ラッセル、ヘンベル、ポパーがふくまれる(McClosky 1985, 12 訳13)——という広範な視野で、論理実証主義やポパーの批判を展開している。そのような明示的な近代批判にもかかわらず、マクロスキーは『国富論』の章句をあえて肯定的に引用し、「専門化がそれ自体望ましいのではない……望ましいのは専門化とそれに次いで交換することである」(McClosky 1994, 74)と言っている。これはスミスの言う分業が、たんに労働の分化(=専門化)のみならず、分化をつうじて他者の消費に値する生産物を提供すること(分化と結合)も同時に意味しているのを解説したものであり、的確なスミス理解と言える。マクロスキーが、スミスの分業論的学問論の真意を理解しているのは、上の引用につづいて、「もしわれわれがたがいの著作をほんとうに読み、自分自身の著作に影響させれば、われわれは自由貿易の経済モデルに真にうまく従っている」(ibid.)として、スミス分業論を学問論の問題にたくみに翻訳していることから知られよう。モダニズムをきびしく批判するマクロスキーが、にもかかわらずスミス分業論に依拠しているこの事例が期せずして示してくれるように、Ⅰ、Ⅱの比較的考察を行う際に両者の根底に諸学問の分業関係が連綿と存在しているというある意味で自明で平凡な事実を、両者を比較考察する時の得難い公分母となろう。

問題は、その共通性の上での歴史的文脈の相違であるが、その点を知るには、Ⅰについてはウェイトリ、Ⅱについてはウォーラスティンに聞くとその相違の輪郭をつかめるように思う。ウェイトリは、他の論文で示したようにイギリスで最初に経済学教授のポストが創られたオクスフォード大学の第二代の経済学教授である(只腰 2010a)。大学では新興の学としての経済学のアイデンティティの確立に腐心する講義をしていたが、彼の著『経済学入門講義』はそのような自身の大学の講義に「実質的变化」(Whately 1832, v)を加えずに本にしたものである。そうした性質をもつ書物の最初の部分で、彼は次のように言っている。すなわち、イギリスにおける最初期の経済学教授としての自分は、「さいきん文明人に占領されたばかりの国の植民者の境遇にあり、雑木林の生い茂った土地をきれいにし、野獣たちを絶滅し、未開人が土壌の開墾に着手する前に彼らの侵入から身を守らねばならない」(ibid., 12)、と。つまり、ウェイトリは新興の学としての経済学を大学で講じる立場の人間としてのみずからを、未開の地の植民者になぞらえている。一見するとネガティブな印象をうける叙述ではあるが、以下で見るⅡと対比すると次のように考えられるのではない。すなわち、Ⅰはまだ近代的な学問体系が確立する以前あるいはその過程なので、未開の沃野を苦勞しつつ開拓していかなければならないが、首尾よく開発した成果については比較的容易にその需要者を見出せるような前望的な学問の生産者の姿を、ウェイトリの言葉からは見て取ることができる。

これに対して、現代の社会科学の動向に関心を示しているウォーラースティンは、現代の社会科学者について、「学者たちは自らのオリジナリティとか、少なくともその社会的有用性とかを明示するような隙間を探し求めている」（Wallerstein 1996, 34 訳72）と述べている。先にデイビスの言葉を借用して現代の経済学方法論は「永久の革命状態」にあると形容したが、この分野でつぎつぎに他者とは異なる学説を競って提起する専門家たちは、自分たちが基盤にしているディシプリンを守るため——自分の分野への需要を確保するため——に、他者が見落としている学問的「隙間」を探索している人々と解釈することが可能であろう（ウェイトリからの引用を上のように解したのは、このウォーラースティンの言葉を対比的に先取りしていたからである）。

ウェイトリとウォーラースティンの言葉を照らし合わせると、同じくディシプリンとしての自立について語りながら、一方ではそれが未開の地を切り開くことになぞらえられ、他方ではそれは過密化した諸学科の配置のなかに隙間を探索することとされている。本稿で考察の対象としているⅠとⅡに関しても、「未開地の開拓」と「隙間の探索」という歴史的文脈の差異を背景に問題を捉えることができよう。

ここでのテーマである経済学方法論をめぐるディシプリンとしての自立と言っても、先に注釈を加えたようにⅡはたしかにディシプリンとしての経済学方法論それ自体の自立ではあるが、Ⅰでは自立する主体は経済学であって、それとの関連での経済学方法論が比較の対象になる。そういう前提の下で比較的是っきりと識別できる差異は、方法論の概念装置として用いられる用語がⅡにおいて洗練化されていることである。別稿で明らかにしたように、Ⅰの時期で私がとり上げたマカロクは「有効需要」（只腰 2018a）を、ウェイトリは「分業」（只腰 2018c）を方法論の概念として活用していた。二人とも経済学のカテゴリーを方法論に転用したのであるが、論理実証主義における検証可能性にせよ、ポパーの反証可能性にせよ、あるいはクーンのパラダイム、通常科学等にせよ、現代の経済学方法論においてはいずれも科学哲学、科学史に固有の専門用語が使用されている。まさしく、Ⅰにあっては、経済学についてもそれを取り囲む他学科にしてもまだ相対的に未開状態であったのに対し、Ⅱにおいては、隙間を探さねばならないほどさまざまなディシプリンが叢生しているので、他の分野から任意に相応しい概念装置を借りてくるのが容易である実情を示している。たしかに、「素人には理解できない秘儀的用語」（Coats 1991, 397）の使用が、各ディシプリンの専門化の一要件だとすれば、Ⅰに比してのⅡの学の洗練化は明らかであろう。

しかしより立ち入ってみると、ⅠとⅡとの比較はそれほど単純なものではないように思われる。たしかに、マカロクの「有効需要」もウェイトリの「分業」もいずれも経済学の用語であり、日常でも使用されるような言葉であって¹¹⁾方法論に固有の専門用語としては相応しくないようにみえる

11) 「『有効需要』（＝一般的等価物である貨幣に裏うちされた需要）の概念」は、「本来は日常用語であった」。（大森 1989, 104）

かもしれない。しかし見方をかえれば、ふつうの人々が日々繰り返している行為から抽象した概念であることも事実である。現代の経済学方法論がそのディシプリンの自立におおきく依拠している科学哲学や科学社会学の分野にかんして、「科学哲学も科学社会学も、ディシプリン化すると、自分たちの生産した情報や自分たちの間でしか通用しないジャーゴンのみによって再生産してゆくので、ついには科学界の実現から遊離した科学観をつくるに至る」と指摘されている（中山 1984, 20）。つまり、諸学が高度に専門化し細分化した現代においては、ディシプリンの自立による専門用語の創出は容易にジャーゴン＝隠語化し、学の自立よりも、学の閉鎖的孤立化を帰結する。

そのような経緯について、経済学方法論の分野についてはハチスンが次のように言っている。第二次大戦後、大学で経済学を専門にする学生や教師の数がひじょうに増えただけでなく、企業や政府での「経済学の『実践家』 economic ‘practitioners’」も同様に増えたので、そのことが、「経済学の分科や下位分科 the branches or subspecialisms of economics の多くで——経済学方法論という学問的な下位分科をも結局ふくむ——きわめて顕著な専門化をもたらした」（Hutchison 2000, 7）。その結果、経済学方法論者をふくむ多くの経済学者は、「彼ら自身の専門分野の研究者仲間との閉鎖的な交流をますますするようになった」（Hutchison 2000, 8）としている。このような専門化の進行は経済学や経済学方法論の分野に限った現象ではないが、専門化・細分化が極度に進んだ結果、その分野「『以外の』専門家集団 communities に属する人々」（Hutchison 2000, 8）との交流がますます少なくなってきたのであった。

これに対して I の時代の特徴を、ウェイトリを例にとって考えよう。別稿で明らかにしたように（只腰 2018c）、ウェイトリはスミス『国富論』冒頭の方業論的学問論との結びつきを強く感じさせる思考法を基盤にして、経済学的概念としての分業論を適用するかたちで経済学方法論を展開していた。当然のことながら彼の時代には、現代と同等の科学哲学は存在しなかったもので、今日の科学論で常用されているような概念装置は彼には無縁であった。しかし、それだけに却って、自前の概念装置を最大限に生かそうとする志向を読み取れるし、未開の土地を開拓して得たもの、すなわち自己の専門分野を掘り下げて獲得したものに根差しているだけに安定した姿勢で概念を駆使できる。その点、他分野からの借り物に依拠していると言ってよい現代の経済学方法論とは異なっている。

その好個の例がブローグである。ブローグは、ポパーの反証主義に立脚して、既述のように「公認の方法論」の代表者として知られているが、その彼が、「私は、現代の経済学者たちがじっさいに、反証主義の方法論に同意していると断言する。……だが、次のことも主張する。つまり経済学者は、勧めることを一貫しては実行していないことを」（Blaug 1992, xiii）と苦しい弁明をしている。現場の経済学者たちが、科学哲学の創案物である反証主義の方法論に現実には従っていないことを認めているのである。

こうした背景のなかで先に紹介したシェイバスは、経済学方法論を科学史の一部門とみなすこと

を提唱している。彼女は言う。「われわれ経済学史家は、主流派経済学者から距離をとり、より独立した名声を獲得すれば、経済学の専門家からじっさいにより多くの尊敬を得ることだろう」(Shabas 2002, 219), と、さらに続けて、「もしわれわれが自分自身の言葉で経済学史を書き始めた時には、現代の経済学者はわれわれのもっとも貴重な受け皿になるであろう」(ibid., 220)と主張している。ここで直接に語られているのは経済学史であるが、彼女自身、方法論的研究を行ってきたので、上の言は経済学史の下位分野とされる経済学方法論にもあてはまろう。現に、経済学方法論について比較的最近、論じたワイントraubの論文においても、シェイバスの提唱は基本的に肯定されている(Weintraub 2007)。要するに、経済学方法論にかんして他分野の概念装置の利用にとどまらず、分野の移転が真剣に提案されている。

ここで比較を行っているⅠとⅡについては、ディシプリンの自立との関連で、自己の分野が他分野から特化する面と、他分野と連携する側面との両契機が共存する点で共通性があるように思われる。つまり、ⅠとⅡはともにそのディシプリンの自立を、特化と連携の二契機の微妙なバランスの上に立脚せしめている。それがⅠの時代にあつては、経済学に固有の概念である分業論を用いて、他分野にも応用可能な方法論を論じたウェイトリに見られるように、経済学をその「自立性を持ちながら他の分野に開かれた、分野たらしめようとした」(内田 1989, 166)。つまりⅠにあつては、特化は自立化へ、連携は他分野への開放というかたちをとった。それに対して、Ⅱにあつては、他分野に概念装置を依存するという仕方、連携が依存となり、特化の側面は経済学方法論がその母体である経済学史、さらには経済学からの孤立として現実化したと言えよう。

繰り返せば、ⅠとⅡはディシプリンの自立をめぐる、他分野からの特化と他分野との連携という両契機を共有する点で共通性を持ちながら、Ⅰにあつてはそれが自立化と開放というかたちを取ったのに対し、Ⅱにおいては、孤立と依存という結果になったのではないか。たしかに現代における経済学方法論は、その専門家が認めるようにディシプリンとしての自立を果たしたとは言えるが、19世紀前半期のディシプリンの自立との歴史的対比というプリズムを通すと上のようなことが言えるのではないだろうか。

参考文献

- 内井惣七 1995 『科学哲学入門—科学の方法・科学の目的』世界思想社。
 内田義彦 1988 『内田義彦著作集 第一巻』岩波書店。
 ——— 1989 『内田義彦著作集 第八巻』岩波書店。
 大森郁夫 1989 「貨幣と流通の経済学体系」大森郁夫編『市場と貨幣の経済思想』昭和堂。
 只腰親和 2010a 「ウェイトリ経済学と演繹法」只腰親和、佐々木憲介編著『イギリス経済学における方法論の展開』昭和堂。
 ——— 2010b 「経済学方法論の現在」同上書。
 ——— 2016 「デュガルド・ステュアート道徳哲学における経済学方法論の形成」『経済学論纂』56巻3・4号。

- 2017「ジェイムズ・ミルの経済学方法論」益永淳編『経済学の分岐と総合』中央大学出版部.
- 2018a 「マカロクの経済学方法論」『経済学論纂』59巻1・2号.
- 2018b 「序」, 只腰親和, 佐々木憲介編著『経済学方法論の多元性—歴史的視点から』蒼天社出版.
- 2018c 「ウェイトリのカタラクティクスとスミス分業論の関連」同上書.
- 田中正司 1988 『アダム・スミスの自然法学—スコットランド啓蒙と経済学の生誕』お茶の水書房.
- 戸田山和久 2005 『科学哲学の冒険—サイエンスの目的と方法をさぐる』日本放送出版協会.
- 富永健一 1984 『現代の社会科学者』講談社.
- 中山茂 1984 「パラダイム論の展開」中山茂編著『パラダイム再考』ミネルヴァ書房.
- 野家啓一 1993 『科学の解釈学』新曜社.
- 矢島杜夫 1993 『論理学体系の形成』木鐸社.
- Ashley, W. 1909 "Introduction" in J. S. Mill, *Principles of Political Economy with Some of their Applications to Social Philosophy*, London: Longmans, Green and Co.
- Backhouse, R. 1994 "Introduction: New Directions in Economic Methodology," in *New Directions in Economic Methodology*, ed. by R. Backhouse, London and New York: Routledge.
- 2004 "History of Economics, Economics and Economic History in Britain, 1824-2000," *European Journal of Economic Thought* 11.
- Blaug, M. 1980 *The Methodology of Economics: or How Economists Explain*, Cambridge: Cambridge University Press (2nd ed. 1992).
- Boumans, M. and J. Davis 2010 *Economic Methodology-Understanding Economics as a Science*, London: Palgrave.
- Boylan, T. and P. O'Gorman 1995 *Beyond Rhetoric and Realism in Economics: Towards a Reformulation of Economic Methodology*, London and New York: Routledge.
- Caldwell, B. 1982 *Beyond Positivism : Economic Methodology in the Twentieth Century*, London: Allen and Unwin.
- 1989 "The Trend of Methodological Thinking", *Ricerche Economiche* 43.
- Caldwell, B. ed. 1984 *Appraisal and Criticism in Economics, A Book of Readings*, Boston: Allen & Unwin.
- Coats, A. 1991 "Economics as a Profession," in *Companion to Contemporary Economic Thought*, eds. by D. Greenaway, M. Bleaney and I. Stewart, London: Routledge.
- Davis, J. B. 2003 "Economic Methodology since Kuhn," in *A Companion to the History of Economic Thought*, eds. by W. Samuels, J. Biddle and J. Davis, Malden: Blackwell Pub.
- Dow, S. 1997 "Mainstream Economic Methodology," *Cambridge Journal of Economics* 21.
- Hands, D. 2001a "Economic Methodology is Dead—Long Live Economic Methodology: Thirteen Theses on the New Economic Methodology," *Journal of Economic Methodology* 8: 1.
- 2001b *Reflection without Rules: Economic Methodology and Contemporary Science Theory*, Cambridge: Cambridge University Press. 高見典和, 原谷直樹, 若田部昌澄監訳『ルールなき省察—経済学方法論と現代科学論』慶應義塾大学出版会 2018.
- Hutchison, T. 1938 *The Significance and Basic Postulates of Economic Theory*, London: Macmillan.
- 2000 *On the Methodology of Economics and the Formalist Revolution*, Cheltenham: Edward Elgar.
- Kirzner, I. 1960 *The Economic Point of View*, Indianapolis: Liberty Fund, 2009.
- McClosky, D. 1985 *The Rhetoric of Economics*, London: Wisconsin University Press. 長尾史郎訳『レトリカル・エコノミクス』ハーベスト社 1992.

- 1988 “McClosky Paper”, in *The Popperian Legacy in Economics*, ed. by N. De. Marchi, Cambridge: Cambridge University Press.
- 1994 *Knowledge and Persuasion in Economics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mill, J. S. 1843 *A System of Logic: Ratiocinative and Inductive* in *Collected Works of John Stuart Mill*, eds. by J. M. Robson et al. vol. 7-8, Toronto: University of Toronto Press. 1974.
- 1844 *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy* in *Collected Works of John Stuart Mill*, eds. by J. M. Robson et al. vol. 4, Toronto: University of Toronto Press.
- Redman, D. 1991 *Economics and the Philosophy of Science*, Oxford: Oxford University Press. 浦上博達監訳, 橋本努訳『経済学と科学哲学』文化書房博文社 1994.
- Shabas, M. 1992 “Breaking Away: History of Economics as History of Science,” *History of Political Economy* 24: 1.
- 2002 “Coming Together: History of Economics as History of Science,” *History of Political Economy* 34: 5.
- Shumway, D. R. and E. Messer-Davidow 1991 “Disciplinarity: An Introduction,” *Poetics Today* 12.
- Wallerstein, I. 1996 *Open the Social Sciences. Report of the Gulbenkian Commission on the Restructuring of the Social Sciences*, Stanford: Stanford University Press. 山田鋭夫訳『社会科学を開く』藤原書店 1996.
- Weber, M. 1905 *Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik, Gesammelte Aufsätze zum Wissenschaftslehre*, Tübingen: Verlag von J. C. B. Mohr, 1922. 森岡弘通訳『歴史は科学か』みすず書房 1965.
- Weintraub, E. R. 2007 “Economic Science Wars,” *Journal of the History of Economic Thought* 29.
- Whately, R. 1832 *Introductory Lectures on Political Economy*, 2nd ed. Reprint, New York: Kelley, 1966.
- （中央大学経済学部教授 博士（経済学））